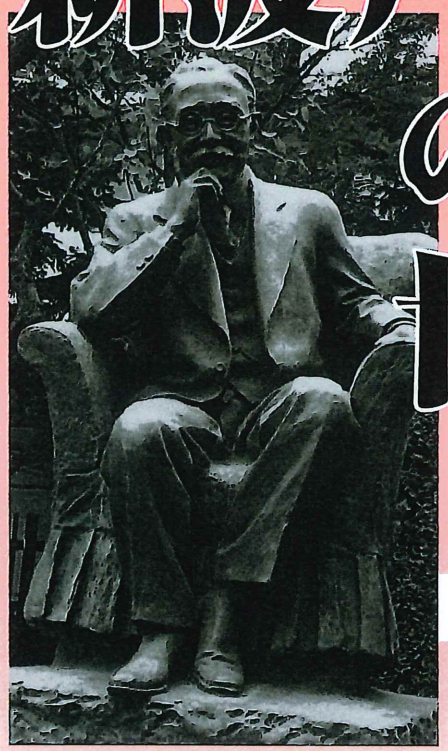
新渡戸ワールドを身近に――

# 新渡戸稲造の世界



一般財団法人 新渡戸基金

第29号 2020


「黒崎幸吉と藤井武」佐藤　全弘
「二人の国際人　渋沢栄一と新渡戸稲造」草原　克豪
「札幌遠友夜学校の校章・校旗と佐々木酉二先生」堀田　国元
「新渡戸を仰ぎ見ながら、LBIの六年間の奮闘記」高橋　郷
「新渡戸稲造の女性リーダー育成術」長本　裕子




▨論文▨

## 札幌遠友夜学校の校章・校旗と佐々木酉二先生

一般財団法人機能水研究振興財団理事長　堀　田　国　元

筆者は昨年、本誌第二八号に「恩師の絆 石塚喜明先生」を寄稿させていただいた。その中で石塚先生が札幌遠友夜学校（通称「遠友夜学校」）でボランティア教師を務めていたことを紹介し、一枚の写真を添えた。それは創立者で校長の新渡戸稲造先生が二〇余年ぶりに帰校された際の集合写真であった。遠友夜学校を知る人にとっては馴染み深い写真であるが、そこに写っている校章と校旗はこれまでほとんど注目されて来なかった。校章と校旗をデザインしたのは、校長の半澤洵先生の研究室（北大農学部農芸化学科応用菌学講座）で学んでいた北大生の佐々木酉二教師（後に同講座の第二代教授）である。そしてご遺族が、校章・校旗作製の顛末や授業の様子が活写されている佐々木先生の遺稿（「酉のたわごと」）を筆者にご恵送くださった。本稿では、これらのことを中心に紹介させていただく。

# 札幌遠友夜学校の概要

札幌遠友夜学校（財団法人）は、経済的な理由などで学校教育を受けられずにいた子供たちや晩学の人たちの教育のために新渡戸稲造・萬里子夫妻によって一八九四（明治二七）年に設立された。その動機は、萬里子夫人が生まれる前から実家（米国フィラデルフィア）のお手伝いとして過ごしていた黒人女性から萬里子夫人のために二千ドルが贈られたことにあった。予ねて貧児の教育を想っていた夫妻はその使い道を相談した結果、そのための夜学校をつくることになり、校名を論語の「有朋自遠方来不亦楽乎（友あり遠方より来る亦楽しからずや）」に因んで「遠友夜学校」と名付けた。「遠」の字には、生後間もなく亡くなった夫妻の子宝「遠益（トーマス）」の一字も込められていると伝わっている。校舎は古い木造の家屋（現札幌市中央区南四条東四丁目、新渡戸稲造記念公園）を購入して用いた。なお、当時の札幌農学校は現在の札幌市時計台付近（北一～二条西一～二丁目）にあった。遠友夜学校の教育活動は、時代（戦争）の影響により一九四四（昭和一九）年に閉校せざるを得なくなるまで五〇年に及んだ。校長は、初代新渡戸稲造（終身。一八九四～一九三三年）、第二代新渡戸萬里子（一九三四～三八年。同年逝去）、第三代半澤洵（一九三八～四四年。同年閉校）と受継がれたが、実行責任者は「代表」であった。代表は、新渡戸校長が兼ねていたが、一八九七年に病気療養のため札幌農学校教授を辞し札幌を離れた後は、宮部金吾、大島金太郎、有島武郎、蠣崎知二郎、野中時雄、小谷武治、そして半澤洵と受継がれた。財政的には社会事業に深い理解を持つ人々の寄付金を基に三島常盤氏が中心となって運営された。教育は、校是である「リンカーンに学べ」と「学問より実行」に基づき知育、徳育および体育が初等部と





中等部で行われ、男子生徒には「倫古龍（リンコルン）会」、女子生徒には「菫会」が徳育のために開校当初から置かれていた。教師は代々無償で札幌農学校・北大の学生が務め、その数は六〇〇名に及んだ。卒業生は延べ一一一六名（男子七二九名、女子三八七名）に達した。

一方、校歌と校章・校旗は開校当初にはなかった。校歌は有島武郎教師（札幌農学校第一九期生、当時二十一歳）によって一八九八（明治三一）年に創られたが、その年は新渡戸夫妻から後事を託された宮部金吾第二代代表が就任した年であった。校章と校旗は佐々木酉二教師のデザインによるもので、採用された一九二九（昭和四）年は新校舎が完成した年であった。校歌は生徒たちが愛唱し、校章（徽章）は男子生徒が帽子に、女生徒は胸に喜びとともに誇らしげにつけることとなった。校旗は、翌年三月、中等部卒業生によって夜学校に寄贈された。校章と校旗は夜学校の記念行事のときに壇上を飾った。

新渡戸校長は、札幌を離れてから二度帰札した。最初は一九〇九（明治四二）年、二度目はその二二年後の一九三一（昭和六）年五月のことであった。五月一八日、北大での講話を終えて遠友夜学校に足を運び、六〇名ほどの生徒たちに講話を行い、深い感銘を与えた。写真1（1）はその時のものだが、新渡戸校長の左右に遠友夜学校の校章と校旗が写っている。

この校章（写真1（2））は、閉校後五〇年経った一九九四（平成六）年六月二一日、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会（会長 石塚喜明 日本学士院会員・北海道大学名誉教授・元遠友夜学校教師）によって記念講演会が開かれた際、壇上の背景に堂々と掲げられていた（『思い出の遠友夜学校』参照）。

一方、遠友夜学校跡地に、新渡戸先生の書による「学問より実行」の金属銘鈑が正面に嵌め込まれた台座の上に新渡戸稲造夫妻のレリーフを抱く青年像が記念顕彰碑として建立されており（写真1（3））、そのレリーフの上にも校章が冠されている。顕彰碑の建立は、最後の校長と代表を兼任し、責

任をもって遠友夜学校の幕引きを担った半澤洵先生（北海道大学農学部名誉教授）が切望されたことであった。さらに、この校章は二〇〇五年に創立された「平成遠友夜学校（藤田正一校長）」によって採用されている（http://enyuyagakkou.web.fc2.com/）。

（1）講話する新渡戸校長と校章・校旗

（2）校章

（3）新渡戸夫妻のレリーフを抱く青年像

**（写真１）遠友夜学校の校章と校旗**

校章と校旗が表象している内容については、「札幌資料館」が保管していた「遠友夜学校記念室」のレリーフの中に下記枠内のように説明されている。しかし、来歴については『思い出の遠友夜学校』を含めて書き残されたものは見当たらない。

**遠友夜学校の校章／教師 佐々木酉二 制作**

雪をかたどる銀白色の六角晶は、清浄、無垢、高潔など、人間として持つべき心を。その中に瞬く六つの星は、久遠、真理、理想、希望など、人生に臨む心を秘め、また、中央の金色に輝く「遠友」の二文字には、友愛、喜び、勇気など、共に学び培う人生の宝を託して昭和4（1929）年に制定されました。

**遠友夜学校 校旗**

遠友夜学校の校旗は、昭和5(1930)年3月の中等部卒業生が寄贈したものです。濃い紺色の中に凛として輝く銀白色の六角晶、そして金色に浮かび出す「遠友」の二文字は、夜明けの光のような気品をたたえています。

出典：「遠友夜学校記念室」・「札幌資料館」





## 校章と校旗の誕生秘話

昨年（二〇一九年）三月、佐々木民彦氏（佐々木酉二先生の次男）より先生の遺稿「酉のたわごと」が筆者の元に恵送されてきた。中にはいくつもの秘話が記述されており、佐々木先生が北大生のときにボランティア教師をしていた遠友夜学校に関することも含まれていた。遠友夜学校の校章と校旗が生まれたときのエピソードや生徒たちの息遣いが伝わってくるようなタッチで描写された授業の様子が記述されていた。なお、この部分は筆者が札幌農学同窓会（松井博和理事長）の会誌第二四号（二〇一九）に寄稿した内容と重複することをお断りする。

：半澤先生は、「恵まれない者のために尽くそう」とのお心が深く、先輩の新渡戸稲造先生や先生の恩師の宮部金吾先生の御意志を継いで、貧困家庭の子女のためにつくられた遠友夜学校の経営に尽力されておられた。酉二も学生時代に友人の新井場清君に誘われてボランティア教師として遠友夜学校に毎夜奉仕的に行っていたことがある。先生が夜学校の先生や生徒等から慈父のように慕われていたのは云うまでもない。遠友夜学校でのボランティア教師は全部北大の学生で、勿論無報酬で文字通り手弁当での奉仕の仕事であったが、生徒達の「勉強したい」という熱意に打たれ、教師一同は自腹を切っても奉仕したものである。酉二を誘ったクラスメートの新井場君は京都出身の秀才であったが、下宿を出て遠友夜学校の二階の部屋に教師仲間数人と寝泊まりして夜学校の仕事をしていた。酉二は、真面目で年上の新井場君を大事に仲よくして居たので、夜学校へ行ったときよく同君の部屋で話し込んだものである。酉二が夜学校に奉仕していた頃、夜学校の中等部の生徒として応用菌学講座

の雇員の大坊亥之助君、そして給仕の伊藤房子君が入っていた。大坊君が中心となって校章と校旗をつくろうという希望が全校に起こり、全校の生徒教師から校章の図案を募ったことがあり、酉二のデザインが最上位となり決定した。男子生徒のリンコルン会、女子生徒の組織すみれ会が一緒になり、翌春卒業する生徒達が醵金してこの校章を入れた校旗を造り、後輩のため夜学校に残して行こうということになった。生徒たちの乏しい醵金ではその望みも叶えられそうになく、皆が頭を悩ませていることを聞いた酉二は、兄留治の友人だった山本旗店の店主にこの話をしてよくよく頼み込んだ。山本さんも昔、遠夜学校の生徒だった経歴もあるので、特別に採算を度外視して校旗の制作を引き受けてくれた。濃紺の塩瀬の生地に「札幌遠友夜学校」という文字を真白に白抜きにし、中央に金糸銀糸のべた縫いで校章を浮き上がらせ、周囲をたっぷりと金糸の房で囲んだ実に立派な校旗が出来てきたときの生徒の喜び様は大変なものだった。

夜学校では又、酉二にいろいろな事を経験させ、教えてくれた。はじめて酉二が受持ったのは初等科の理科の授業だった。今日は魚の体を鮒の解剖図を示して説明するのだと思いながら教室に入ったところが、小さな鼻水垂らした子から大きな三〇歳位の生徒まで入り交じってきちんと机に座り、酉二が教壇に上がるのを待っていた。教壇の前の教卓の上に大きな新聞紙に包んだものが置いてある。「何だ?」と聞くと、一人の小さな鼻たれ小僧が「先生が〝生きた鮒があれば皆で解剖して実験するのだが〟と云っていたけど、鮒が手に入らなかったので代わりに鰊を五尾ばかり店からもらってきました。授業に使ってください」と云った。酉二はびっくりしたが、普段はいたずらばかりしているその小僧が魚屋の小僧だったので店に迷惑をかけたのではないかと思いたしなめたが、「おかみさんも、





よいと云いました」というので生徒を教卓のところに集め、この鰊を切り開いて内臓を説明し、動物の身体の仕組みを実際に示すことができた。生徒らの中には家事見習い奉公の女性もいたが、料理のときは食用部だけが目的で魚体を切りさくので、魚体を解剖して理科的に見るのは初めてだった。生徒は皆どの目もどの目も輝いていたのが忘れられない。「余った鰊は、銭もとらず教えてくれる先生にお例にあげるから食べてもらえ」と魚屋の夫婦が云ってよこしたというので、校舎に泊り込んでいる学生仲間の先生たちにあげたら皆喜んでいた。あの鰊は特別うまいだろうと酉二は思った。

リンコルン会やすみれ会では皆の都合のよい昼に藻岩山の登山や銭函海岸の海水浴などに行ったりしたが、他人の下で働いている生徒が多いためか生徒仲間と先生だけのこの行事は何よりも嬉しいらしく、つつましくも賑やかなものだった。特別授業で「造形美術」や「短歌俳句」などを酉二は話をしたが、こういった事柄は彼らの周囲や本や他人から学ぶことがほとんどないので教室に溢れ床に座り込んでまでも熱心に話を聞いていたものである。酉二にとっては、「人に教えるという事は、先ず自分が学び且つ教えることも学ばねばならない」ということ、「貧しくとも志あれば機会ある毎に学ぶことができる」、そしてマーク・トゥエンの云った「大学とは学問を学ぶところではなく、学ぶ術を学ぶところである」ということをしみじみと感じたのである。又、支那の賢人の云う「学びて之を知る 又楽しからずや」、「知りて之を行う 又よろこばしからずや」の意味するところもわかったような気がした。

## 元生徒の話

一九九四年六月、札幌遠友夜学校創立百年記念事業会によって記念講演会が開かれた。会長の石塚先生の挨拶に続いて、佐藤全弘先生（大阪市立大学）と山本玉樹先生（北海道大学）による講演、元教師の高井泉先生（玉川学園大学元教授）、元生徒の中村幹生さん（中等部六期生）および新渡戸稲造先生御令孫の加藤武子氏によるスピーチが行われ、約三百人の参加者に深い感銘を与えた。その中で、校章や校旗ができた当時の生徒であった中村幹生さんは以下のように語っておられる（『思い出の遠友夜学校』の中から抜粋）

…生徒の皆さんすべてにとって（遠友夜学校は）たった一つの灯台だったと思います。…夜学校は私たちに光と勇気を与えてくださいました。なぜかと言いますと、とにかく先生と生徒の仲がいいんです。受け持ちに関係なく、どの先生も生徒一人ひとりに目を配っていらっしゃいました。…私の在学中、確か中等部一年生か二年生（昭和三、四年頃）のときに学校の記章ができました。記章ができたときの晴れがましさ、男の生徒は小遣いを工面しましてね、帽子を買ってピッカピッカの記章を付けたんですよ。本当に喜びました。

…新渡戸先生がお出でになった当日は提灯をつけて、夜、駅前に並びました。先生はわざわざ私たちの輪の中に入ってらして「明日か明後日行くよ」とかおっしゃってくださったときはもう嬉しくて感動しました。夜学校での新渡戸先生のお話は初めと終わりの部分だけしっかりと覚えているんです。初めの話は、アメリカのお手伝いさんの話。その人は先生の奥様が生まれたときから付いておら





れた方なんですって。そのお方が「これは私がご当家にご奉仕に上がったときから一銭も使わずにためたお金でございます。どうか東洋の貧しい方のために使ってください」と言われたそうです。それで、遠いアメリカの友の応援によって基金になったのだから、「遠友」と名付けたと。またこれは、論語の「友遠方より来る、また楽しからずや」に通じる。それで「遠友」という名を付けたと。…アメリカには何と素晴らしいすてきな偉いお手伝いさんがいらっしゃるのだろうと感動しました。…新渡戸先生はお話の最後に「私は遠友夜学校にたびたび来てあげたいけれど、忙しいので二〇年たったらまた来るからね」とおっしゃいました。そのとき私は、本当に慈父のように感じました。その温顔、その心が伝わってくるんですね、新渡戸先生は。

## 遠友夜学校と「パストゥール会」

遠友夜学校の運営に最も長く責任者として関わったのは、最後の校長と代表を兼務していた半澤洵先生である。半澤先生は同時に北海道帝国大学農学部農芸化学科応用菌学講座の初代教授を務めており、大学における専門研究・教育とともに遠友夜学校の校長という二足の草鞋を履いておられた。その下で応用菌学と教育福祉を学び、継承したのが第二代教授となられた佐々木酉二先生、すなわち遠友夜学校の校章と校旗を創った佐々木酉二教師その人である。佐々木先生の最後の門下生（学部から博士課程修了まで七年間）である筆者は、応用菌学教室には「縁の下の力持ち精神」ともいうべき実学的専門研究と教育福祉の精神が伝統として継承されており、その淵源は遠友夜学校にあったのではない

かと今更ながら感じでいる。

半澤洵先生は札幌生まれ（明治一一年、一八七八年）の札幌農学校一九期生（一八九二年、有島武郎らと同期）である。在学中から遠友夜学校の教師を務めていたが、卒業（一九〇一年）後は遠友夜学校第二代代表で世界的な植物学者であった宮部金吾先生（札幌農学校二期生）の植物学研究室の研究生となった。一九〇四年から助教授を務め、一九〇七年から応用菌学の講義を担当した。一九一一年から三年間、独と仏（パストゥール研究所）に留学した。帰国（一九一四年）した翌年、新設された応用菌学講座（わが国最初の応用微生物学講座）の教授に就任し、一九四一（昭和一六）年の退任まで四半世紀に亘って土壌、食品、および畜産などの応用菌学の研究に献身され数々の業績を上げられた。中でも有名なのは近代的納豆製造法の開発研究で、「納豆博士」と綽名された。

佐々木先生は札幌の中心部で生まれ（明治四二年）育ち、北海道帝国大学に入学して半澤先生の下で応用菌学を学び、昭和恐慌最中の昭和六（一九三一）年に卒業した。卒業後、しばらく助手を務めていたが、半澤先生の計らいで北海道製酪販売組合連合会（後の雪印乳業）に派遣され、同連合会の研究室立上げに尽力した。昭和一四年に助教授として大学に復帰し、昭和一六年に半澤先生の後を継いで応用菌学講座を担当することとなった。昭和二〇年、終戦直前に教授に昇進され、昭和四七年に定年退官されるまで三〇年にわたり講座を主宰された。

「酉のたわごと」の中で、教室の戦中、戦後を振り返り、以下のように述懐されている。

…研究室では戦争激化に伴う石炭不足により、厳冬期には暖房もほとんど通らなかったので実験室に大きな鉄釜に木炭を焚いてその周りで手を温めながら実験するという有様であった。学生諸君も





卒業してもどうなるのか不安一杯で、研究も上の空となり勝ちであった。正に虚脱状態に陥っていたのである。そのとき酉二は、「これではいけない、何とかして乏しい中にも研究意欲をかき立て敗戦国家の立て直しに学徒としての意地をもたせねばならぬ」と考え、どんなつまらぬことでも卒業生は各自の職場で行っている工夫や現状、将来への思考方向、学生は無垢な若者として先輩の経験を学び、それを基として自己の考え方を正しくするために、応用菌学教室出身者と在校生との集まりをつくり、密接な話合いの場をもち、それにより相互に磨き合い援け合う場にしようと思い立った。そして、微生物学の開祖ルイ・パストゥールが一八八二年一二月二七日、フランスのアルボアの地に誕生したことと半澤先生が日本人最初のパストゥール研究所留学生であることから、この集まりをパストゥール会と名付け、毎月二七日に開くことに決めたのである。その後、この会は関東や関西に在住の教室出身者によっても東京パストゥール会、関西パストゥール会として折あるごとに開かれている。先輩後輩の絆は固くなり、相互に知識経験の交流の場となっていることはまことに喜ばしいことである。

…パストゥール会は昭和二一年一月から始まり、佐々木先生が定年退官された年（昭和四七年）の一二月まで特例（半澤先生の葬儀と佐々木先生の退官記念パーティ）を除いて二七年間計三二二回連続して開催された。大学の毎月二七日の集まりでは、主として卒業生や講座の先生方が講師となって実学的な話題を提供し、講座の学生もいっしょに拝聴し、終了後に歓談することが習わしであった。パストゥール会は、不定期ではあるが今も続いている。パストゥール会の活動、すなわち卒業年次を超えた自由闊達な交流が続けられた原因は、やはり佐々木先生による設立精神と継続する努力に多くの卒業生が感化されたためと思われる。新渡戸稲造精神を受け継いだ半澤先生以来、応用菌学講座には「縁の下

の力持ち的」チャレンジ精神が脈々と流れている。因みに、平成二七（二〇一五）年に応用菌学講座開設一〇〇年記念の祝賀集会がパストゥール会の呼びかけにより一五〇名を超える卒業生が全国ならびに米国から参加して学士会館において開催された。新渡戸基金の藤井茂理事長より祝電をいただいたことは誠にありがたいことであった。

半澤洵先生

佐々木酉二先生

佐々木先生書

## おわりに

遠友夜学校は、学びたい人たちと教えたい人たちの相思相愛の夜学校であった。これこそが五〇年もの長きにわたって無償の教育福祉活動が営々と貫き通された主因であろう。卒業生の多くが立派な社会人として育っていったのは言わずもがなである。三〇〇名に及ぶ参加者が札幌遠友夜学校百年記念講演会に集ったこと、そして『思い出の遠友夜学校』が編纂され発刊されたことが遠友夜学校の絆の深さの証であろう。記念講演会の壇上の背景に見事な校章が掲げられていたことを当時病床に伏せ





ておられた佐々木先生に報告できなかったことに筆者は今忸怩たる思いをしている。本稿と『思い出の遠友夜学校』を持ってお墓参りしたいと考えている。余談だが、佐々木先生は画家を志望したほどの絵画力をお持ちであった（『我が心の微生物』参照）が、半澤先生の指示で応用菌学を研究している間は絵筆を折っておられた。校章と校旗は若き頃の最後の作品であったのかもしれない。因みに、前掲の「佐々木先生書」は白内障手術で視野狭窄となった中で書かれたもので、「有朋自遠方来不亦楽乎」が見て取れる。

本稿では、遠友夜学校の校章と校旗をめぐる秘話に加えて半澤洵先生が初代、佐々木先生が第二代の教授を務めた応用菌学講座の同窓会である「パストゥール会」についても紹介した。筆者にとって恩師中の恩師である佐々木先生を通して学ぶことができた新渡戸稲造先生の教えが反映された一つの姿として「縁の下の力持ち精神」を読み取っていただければ幸いである。

今、平成遠友夜学校が藤田正一校長を中心に活動が行われている一方で、一般社団法人「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会（松井博和理事長）」では、新渡戸稲造先生の尊い志を未来へ伝えたい想いを強く持ったメンバーが集い、遠友夜学校の精神を宿した新しい場を札幌に創るために活動している（http://nitobe-enyu.org/）。筆者も応援者の一人として新しい場の実現を願っているが、そこにも遠友夜学校の校章が引き継がれることを夢想している次第である。

### 参考資料

札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』、北海道新聞社、二〇〇六年。
佐々木酉二『わが心の微生物』、東京パストゥール会編、一九九三年。